

# 平成 27 年度自己評価結果公表シート

認定こども園美哉幼稚園

## 1、本園の教育目標

### 建学の精神

み仏の知恵と慈悲に照らされて、  
他の人や、物のいのちの上に生かされ、  
み仏の限りない願の中に、  
命の尊さを知り大切にする。

### 教育理念

もん し

聞 思 —よく聞き よく考え よく遊ぶ

### 教育目標

おもいをわかちあう  
ことばをつたえあう  
からだをきたえあう  
いきものとむつみあう  
ちがいをみとめあう  
うつくしいものにひびきあう

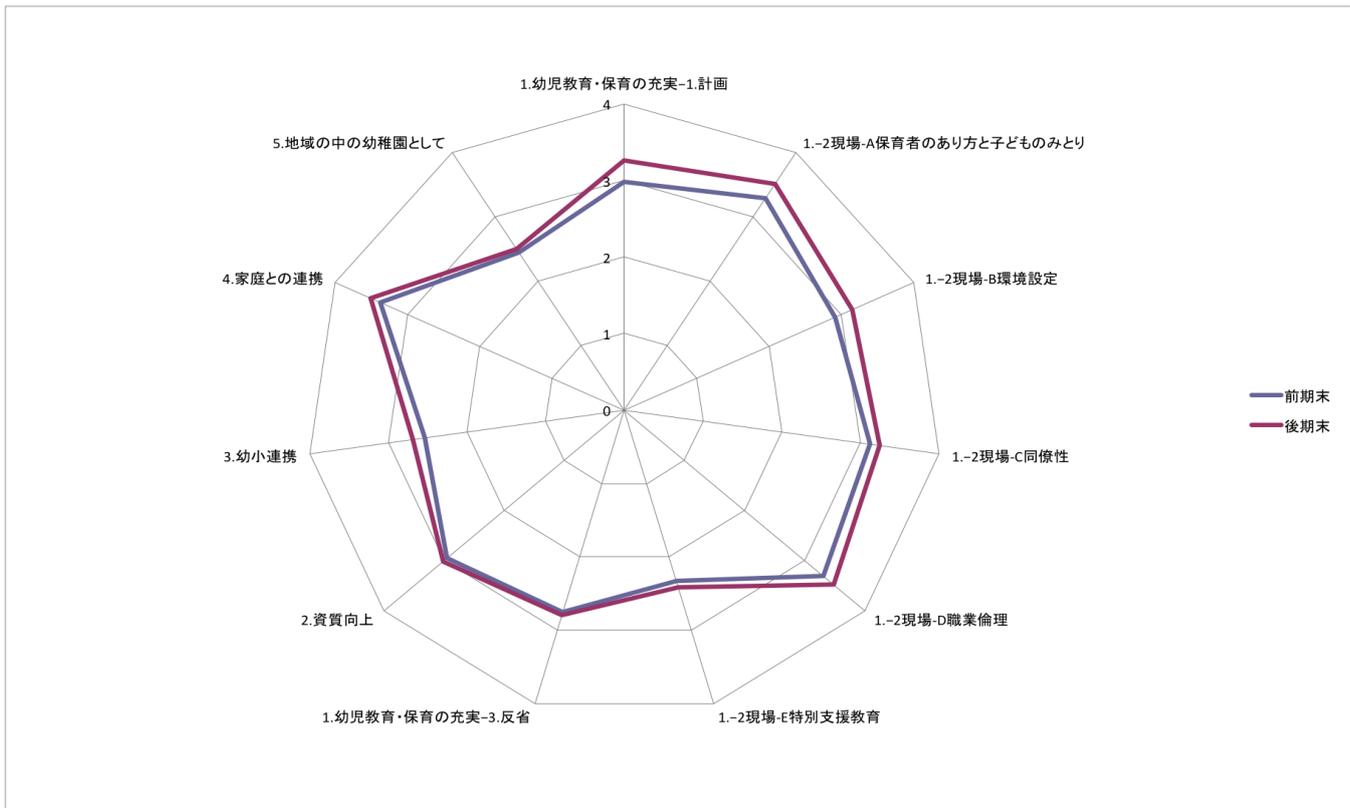
## 2、27 年度重点事項

- ① 三歳未満児保育の構築と確立
- ② 未満児保育と以上児保育との連携
- ③ 安全点検

## 3、評価項目の達成及び取組状況

評価項目	取 組 状 況
三歳未満児保育の構築と確立	<p>平成 27 年度より認定こども園として満 1 歳、1 歳児のクラスと給食施設とを新設しての初年度である。満一歳からの幼児教育をする施設として、子どもの自発性・主体性を育むというのが以上児未満児を貫く保育の原理であり、その実現のための方法は、主体性→環境設定保育→担当保育士制である。この必然的な結びつきによって、教師主導の保育ではなく、子ども中心の保育、個が保証される保育となる。その実現のための具体的な単位は〈選んで一遊んで一片付ける〉である。</p> <p>日々の試行錯誤を続けながら、上記の単位での生活は年間を通して相当程度身に着いてきて、担当制も円滑に機能し、一年の到達度としては高いものとなった。</p> <p>園で過ごす時間の長い園児が多いため、一日の全体をどのように活動の質を変えて過ごすのかは、依然大きな課題である。</p>

<p>未満児保育と 以上児保育との 連携</p>	<p>一斉保育はほとんどせず、個の保障のためのコーナー設定保育をする未満児とは、保育の内容、方法、環境設定が異なる以上児保育である。だからこそ、両者の連続性と非連続制を意識しながら認定こども園としての全体性を保つことが課題となる。年度当初の職員不足や初年度特有の多忙さによって、教職員間で十分に保育に関する議論を行う時間が取れなかったのが実情である。</p> <p>ただし、フルタイム職員のミーティングを月1回に定期化して行うようになった。更に以上児、未満児のそれぞれのミーティングをしていく必要がある。かつ給食スタッフは初年度に当たり、献立をすべて一から考えなくてはならないことを始めとする激務により、保育現場と連携した食育活動にまで手が回らない状況であった。来年度からの課題である。</p>
<p>安全点検</p>	<p>毎月1回園舎内外の施設や遊具の点検を行っている。いつも問題に上がるのは、総合遊具であり、さびや腐食が進んでいる。部分的な処置では手に負えず専門業者による修理をするにも、ここまで老朽化すると、その費用をかけるに値するのかは疑問である。そうかといって日々園児たちが遊んでいる遊具を撤去するにはためらいを覚える。</p> <p>とはいえ、遠からず撤去が必要になるのは明らかである。</p>
<p>教員の自己評価</p>	<p>各教員が自己点検をした結果を集計し本園の教員の傾向を見ておく。</p> <p>自己評価が高かったのは教育現場に関わる事柄、とくに「保育者のあり方と子どものみとり」に関してであり、しかし特別支援教育に関する事柄は低い値であった。「地域の中の幼稚園として」、また「幼小連携」に関しては、低い値にとどまった。「家庭との連携」に関して高い数値であったのは、保護者対応や連絡をていねいに行おうという意識の反映であろう。</p>



#### 4、重点項目の総合的な評価結果

新施設初年度であるから当然であり予想もされていたことであるが、尋常ではない忙しさであった。加えて教職員不足が一層忙しさに拍車をかけた。しかし、ピンチはチャンスである。初年度の混沌とした状況の中で試行錯誤しながら葛藤した日々は、経験として自らのうつわを広げたというふうに、教職員が自覚できなたら、よいことにかわる。

ことに重点目標①②について、課題は具体化しつつ継続している。そのこと自体、積極的に評価すべきことである。狙っていた保育形態に、一年目にしてここまで定着したかと思えるほどの進捗状況であった。実際、県の指導主事の園訪問の際、保育指導員から未満児保育の保育形態や流れについて、子どもの姿をふまえて、高い評価をいただいた。

#### 5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
未満児保育と 以上児保育との連携	未満児と以上児の保育、担当教員、施設等の全般における連携を指す。以上児、未満児それぞれのミーティングであげられた課題を全体のミーティングで共有し、環境設定や保育形態の異同を確認する。保育者同士がお互いの保育を参観しあい、意見を交わし切磋琢磨する。
運動機能と遊具との 関連	園児が園庭で遊ぶ際に、どのような運動機能を果たしているか。それを、運動要素（くぐる、はう、ささえる等々）ごとの分析を通して、本園の園庭が育てる運動機能を明らかにする。かつ、そこでどのように遊んでいるか、どのような関係や喜びを経験しているかを明らかにする。その過不足をふまえ、園庭をデザインし、遊びを構成する。
食育	給食職員と保育者が連携し、27年度年はできなかった「本物に触れる」食育を展開する。日々の食材を見て、触れる。下ごしらえの手伝いをする。栄養士や生産者に話を聞く。昨年からはじめた年長児のお米当番（自分たちの食べる米を、はかり、研ぎ、炊く）は28年度は年度当初からはじめる。自分たちが研ぎ、口にするお米は、無農薬アイガモ農法で育てられたお米であり、その産地に足を運ぶ等々。